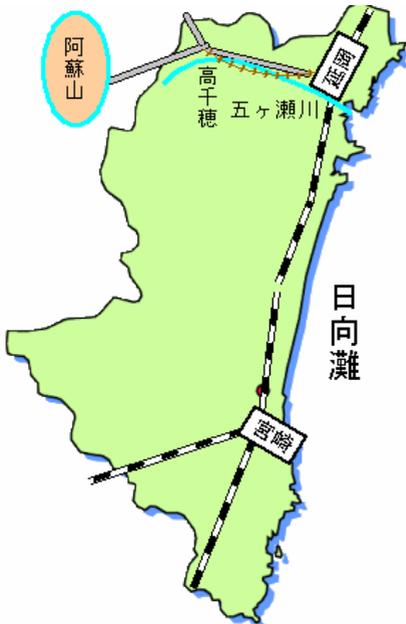


高千穂夜神楽吟行会

平成17年11月21日(月)～23(水)

高千穂神社夜神楽……	4	頁
国見ヶ丘雲海……	5	
天安河原……	10	
神楽宿……	11	
高千穂峡……	11	
柚木野地区笛原の夜神楽	••12	
高千穂・夜神楽関連「語彙一覧」	••16	



高千穂夜神楽吟行会

平成十七年十一月二十一日(月)～二十三日(水)

参加者(棚山波朗、池内けい吾、墓目良雨、
柚口 満、武田禅次、武田孝子、沢ふみ江、飯
田眞理子、杉坂大和、坪井研治)幹事・武田禅次、
孝子。

十一月二十一日(月)



羽田発九時〇五分の JL1883 宮崎空港行きで十一時頃宮崎空港に到着。快晴。正に小春日和を賜った。気温十六℃。

JR 宮崎空港駅から特急で北上して延岡へ向う。一時間の旅。日豊線の右側には日向灘の青々とした海面が延々と望まれる。美しい海の色である。大八島の国生みはこのような美しい海を想像して行われたのであるうか。そして今、季節は十一月も末、高千穂の神々は出雲の國から還られて新嘗祭の準備に忙しいことであるう。

今回の旅は、高千穂の神々を慰めるために村人が夜を徹して踊り明かす高千穂に伝わる夜神楽を見ようという旅である。

宮崎空港駅から延岡まで約九十キロ特急で一時間かかるということなので、空港の売店で鯖鮓、鱈鮓、えぼだいの押し寿司を買い込んで車内で昼食を取る。

缶ビールを一本干すと間も無く列車は延岡に着く。

延岡は徳川親藩の内藤家が長らく治めたところ。市内を五ヶ瀬川が貫通している豊饒な土地である。

内藤家は三河で徳川家を支えた功績により親藩として厚遇されてきた。元は磐城内藤家として芭蕉の頃、内藤風虎や内藤露沾親子が俳諧で活躍したことが知られている。『江戸俳諧六百番句合』に露沾と桃青の句合わせが残っているがこれは内藤家の遺産である。

延岡駅には二十数人乗りの小型バスが待機していてこれに十名乗車という贅沢な使い方。市内はやや古風な町並。途中左手に旧延岡城跡を望みながら五ヶ瀬川沿いに西へ西へと高千穂へ登ってゆくが、今年九月に襲った颱風十四号の爪痕が到るところに見られる。晴れ渡った青空がかえって当時の濁流の凄さを思い起こさせるようである。堤防を溢れた濁流が役場の中にまで入ったという現場を通り過ぎたり、堤防上の県道の交通標識が土台から傾いていたり、流木が川沿いの畑などにまで到るところに散乱していて颱風のすさまじさを見せ付ける。北方(きたかた)から日影(ひかげ)の集落をバスは高千穂を目指して進む。

今回の旅は当初、延岡から高千穂まで第三セクターの高千穂線に乗って五ヶ瀬川沿いをガタゴト

と行く予定であったが、線路が流出してをり、あれ以来不通になっていたので已む無くバスになった訳である。(十一月の報道で清算が決定)

北方という地区を過ぎてから日之影地区にかかると、もう営業を終えている鮎の築場を見かけバスを停めてもらう。かなり広い川幅一杯に柵を作り一箇所だけ魚の通り道を開く大掛かりな築である。

山の日が眩しいくらいに川面に照り映えている。

高千穂鉄道で行くなら谷沿いの低い所を走ってゆくのであるがバスは山の背を貫く道路を走ってゆくので五ヶ瀬川の川筋がはるか眼下に見えるようになってきた。雲海橋(川面まで一三〇メートル)から見下ろすとかなたに高千穂の市街地が見下ろせる。

いつの間にか山々に囲まれた高千穂の神話の町に着いていた。まず、町営の高千穂温泉(銭湯のようなところ)でひと風呂浴びる。湯量が多いがさっぱりとした単純泉。癖の無いところが物足りなかった。入浴は五百円ほどか。タオルを二百円

で買って入った。

今日の宿はこの高千穂温泉からバスで五分ほど山を上った浅ヶ部地区にある民宿「暖心」(のごころと読ませる)。二階にある六つの部屋のうち四つを借りて泊る。早速句会。

高千穂神社夜神楽見学

夕食を済ませて高千穂神社へ夜神楽を見物に出かける。気温は数度位だろう。この寒さに晴れ渡った夜空に星が大粒にかつ美しく見える。オリオンの三ツ星が山の端に触れんばかりに低く見えるのは南国に来たためと実感出来る。

神社の境内には源頼朝の代参で来た畠山重忠が植えた杉が八〇〇年の威容を暗闇の中に見せている。

神社の神楽殿で観光用の神楽を見る。

手力男の「戸取」、天鈿女の「鈿女」それにイザナギとイザナミの「國生み」を見る。酒に酔ったイザナギとイザナミが観客席に下りてきて淫らな真



日豊線車中で鯖の押し寿司の昼食



五ヶ瀬川の鮎の崩れ築

似をするとところで笑いを誘うが素面の我々には中々乗ることが出来ないまま終ってしまつた。宿に帰って二回目の句会。外気温は1℃くらいに下がっている。九州がこんなに寒いとは思ってもみなかった。

崩れ築神代の瀬音取り戻す

紅葉湯にふぐり大きな手力男



高千穂温泉から浅ケ部を望む



高千穂温泉ロビー



雲海橋から高千穂の町を見下ろす
地上まで130メートル



高千穂神社の神楽。イザナギと

イザナミが酔って絡み合っている



宿「暖心」から見た入日

夜神楽の神の浮気は神代より

祖母山の影のかむさる神楽宿

十一月二十二日(火)

国見ヶ丘の雲海を見るに

高千穂の雲海を見ようと朝六時に宿を出る。雲海は夏の季語になっているがここ高千穂の国見が

丘から見る雲海は特別なものらしい丘の上に立つと普段は阿蘇の山並みも見えるし祖母山も見渡せるといふことだが今朝は生憎、阿蘇は見えなかった。その代り祖母山はうっすらと影を見せている。

▲祖母山も傾山も夕立かな 青邨Vのもう一方の傾山はどれかと運転手に聴いたがここからは望めないということであった。

国見の丘の直ぐ北隣に見える祖母山はその名前の通り高千穂の神々の祖母に当たる神をイメージしているのかなと想像して楽しんだ。

この時期に見られる雲海は朝の気温が0℃で快晴、かつ無風が条件であるという。朝の気温は1℃の予報でちよつと見ることは無理かも知れないと言われていたが期待を抱いて出かけてきたのだった。

標高五一三メートルの国見が丘はさすがに寒い。風が頬を刺すようだ。雲海を形成する冬霧は生じているのだが風に流されてしまつて滞留してくれない。日の出の六時五十分まで丘の上に待っていたが雲海にはなつてくれなかつた。

しかしこの国見が丘から高千穂を囲む数々の

山々を眺めていると、山の一つ一つにそれぞれ家族の名を付けて物語を作つてみようとする気持ちが湧いてくる。神話はこうした山々と川を中心に作られたのではないだろうか。

『古事記』に記された国生み、島生み、神生みを周囲の山々にそれぞれ当てはめて考える時間が欲しいと感じたのは日の出と共に現れてくる多くの山々を見ることが出来たためかも知れない。少なくとも神武の東征以前の話の辻褄は高千穂の周辺で片がつきそうな感じがした。

高千穂に朝日生まるる冬の霧

神楽宿月の雫の窟かな

寒卯高天原で三つ喰ふ
鷺猛る高天原の電話線

国見が丘「ニニギの天孫降臨像」



朝6時過ぎ国見が丘は寒い



「暖心」の一階食堂で食後寛ぐ



国見が丘の日の出

一旦宿に帰って朝食を取る。

再び高千穂神社へ

高千穂神社を再び訪れる。この神社は高千穂十八郷八十八社の総社。高千穂皇神が祭神、創建は垂仁天皇の頃で約二千年も前という神話の時代。天津彦火瓊々杵尊（ニニギの尊）アマテラスの孫）などの神様が祀られている。裏手にそのニニギ尊が地付きの神であったと思われる鬼八を退治する木彫がある。社の木壁に枯蟻螂が大きなお腹をしてそれを見守っている。

本殿前の夫婦杉
は夫婦和合の
神木。イザナギ
とイザナミ
よろしく手を
取って三回り
するのは武田
夫妻。大和氏が
それを囃
す寛いだ光景。



高千穂神社夫婦杉を三回
廻ると幸せが訪れる

高千穂神社裏と「鬼人を退治する」イザナギ尊の像



高天原



高千穂地区概略図

大ケヤキの下から湧き出す天真名井
清らかな水音が絶えない



高天原の丘の一带に集まっている
天真名井、高天原遥拝所、
四皇子峰、櫛降神社

耳漱ぐ和なる音や冬泉

高天原の森の不思議な枝ぶり



高天原と呼ぶ山中

くしふる

神社は、古事記に「筑紫の日向の高
四皇子峰で見かけた神像



高天原遥拝所

天孫降臨後に神々が高天原を遥拝した所

千穂の久志布流多氣に天降ります」とある記述から往古は丘そのものをご神体にしていたが元禄七年に社殿が建立された。ニニギ尊、アメノコヤネ尊、フツヌシ尊が祀られている。

天安河原 は岩戸川为天岩戸神社より上流にある。

安河原にていと出し水(ばな)

アマテラスとスサノオが天真名井の聖水を浴びながら誓約(うけい)をしてそれぞれが神々を生みだした後、誓約に勝ったと誤解(古事記ではそう書いてある)してしたい放題をして高天原を困らせたために、アマテラス为天岩戸に隠れ世の中が暗闇になってしまい困り果てた八百万の神々が集まってスサノオを追放処分に決めたところである。スサノオはこの後出雲の国へ旅立つて行くのである。

天岩戸神社 はアマテラスが隠れた天岩戸に因んだ神社。岩戸川を挟んだ対岸にご神体の天

岩屋戸が断崖に懸かるように拝める。樹木や蔦が生い茂っているので判別は中々難しい。樹木や蔦が

落葉掻く天鈿女命かな
島生みのやうに落葉を掻き集め



八百万の神々が集まった天安河原。大きな河窟と礫石が特徴。賽の河原のように石を積んで願い事をする。

神楽宿

かつて庄屋を務めたような大きな民家を神楽宿として見学させている家を見る。普段は昼食などを提供して要望があれば高千穂神楽を演じて見せるという。今日は食事の準備だけがされてあった。



神楽宿の大きな藁廂の外観



神楽宿の内部。神庭が設けてある

橋から二〇メートルほど降りてボート遊びを楽しむ。真名井の滝の飛沫を浴びる近さまでボートを寄せることが出来る。水深は六メートルほどという。颱風十四号の時はここも水没してしまい今も歩道の柵を修理中であつた。



高千穂峡 真名井滝

高千穂峡

高千穂峡は阿蘇火山の溶岩流が形成した柱状節理によって出来た峡谷。ここでは五ヶ瀬川の水はエメラルド色を湛え、流れは静となり静かである。

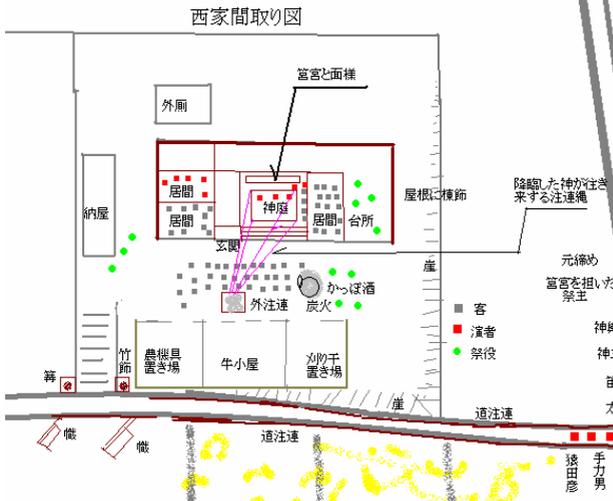
綿虫や静は神代の瑠璃の色
スサノオのゆまゑごとく川底の滝

柚木野地区笛原の夜神楽

① 道神楽（または道行神楽）

夜神楽は氏神様のある地域の氏子の内で神庭が設けられる十分な広さの座敷を持つ家を順番に使用して行われる。柚木野地区笛原では西家が今年の当番に当たったが、当番は大変でしようと尋ねると、当主は「六十年に一度のことだから」と笑っていた。見るところこの西家は夫婦二人暮らしで牛を四頭に仔牛が一頭いる酪農家のようなのである。夜神楽を奉仕する一行は氏神様の柚木野神社に午後三時に集合。柚木野神社は無住であるので宮司さんは別な神社からかけつけて神様を宮宮に移し、預っていた神楽面（面も神様）を奉仕者一行に引き渡す。神楽の装束に着替えた一行はこの神社から当番の家まで行列をするのであるが距離がある場合は途中の適当なところから行列を開始する。今日は西家の手前二〇〇メートルから開始することになった。農道で装束を直し、面をつけ、太鼓を担ぎ、宮宮を背負って道行神楽が始まる。篝火を焚いて待ち受けている、山の斜面にある

西家まで登り道を笛・太鼓の囃しに合わせて進み座敷に設けられた神庭に入って道行神楽は終了。休憩のあとよいよ夜を徹して行われる夜神楽が始まることになる。





皇大神宮の管宮を背負うのは
当屋の西さん



柚木野神社から神様を管宮に移す。



肩の太鼓を打つ



柚木野神社から行列して道行き神楽を
演奏しながら西家へ向う。



外に組んだ神の扱代 (外注車)



西さん入口の竹飾



大太鼓を担いでの道神楽

しんがりに管宮います道神楽
冬夕焼道行神楽棚田沿ひ



西家は篝を焚き七五三縄を張り迎える

② 笛原・西家の夜神楽の始まり

笛原といふ村やさし神楽宿



接待の煮しめ



庭のドラム缶の炭火に暖まる



接待のカッコ酒 (焼酎)



親権倅牛神楽福火に集まる



夜神楽のクライマックス「戸取の舞」岩の後ろは神主さん。右は倒れそうな岩戸を支えている高校生。観光用の夜神楽ではお目にかかれない光景。

祝子者・奉仕者 (ほしやどん)	彫り物(えりもの)	菅宮	神庭(こうにわ)	神楽宿	道(中) 神楽	夜神楽	高千穂・夜神楽・語彙一覧
神楽の舞人。	象徴。 切り絵。鳥居、土火木金水徳神、十千十二支を	神庭の東に置かれる。 皇大神宮(天照)を祭つてある笈のような仮宮。	中央に二間四方用意される。 神楽宿の中で神楽を演じる神聖な場所。家の中	で持ち回りする。 神社以外で神楽を演じる場所。祭場。地域の中	氏神から神楽宿までの道中に演じられる神楽舞	高千穂地方で行われる夜を徹して演じられる十三番の神楽舞	

「高千穂神楽紀行」

七五三（しめ）	高千穂地方特有の注連縄。天神七代、地神五代、日向三代を意味する。
面様	神楽面。神の化身であるので神主が貸し出す。
雲（天蓋）	神庭の天井に作られる。高天原を象徴。雲を突付けて紙吹雪を飛び立たせ神楽は終了。
山（外七五三）	庭にしつらえた神の抛り代。

平成十七年十二月二十五日作成

記録・写真・制作 暮目良雨

印刷・製本 青蛙堂

東京都千代田区神田小川町三―五―四
お茶の水S Cハウス九〇二

